

# 北海道松前公園の桜の縮伐等について・その2

## 1 はじめに

北海道松前町(まつまえちょう)にある松前公園の一角にある「平成27年桜集植地」において、2022年7月13日、2023年2月21日に続いて、2023年7月6日から7月7日までの2日間、縮伐等を行いました。

縮伐は、主幹の断幹や側枝切除というせん定作業を意味し、時期別では、7月は夏季せん定、2月は冬季せん定に当たります。



平成27年桜集植地の「牡丹桜」 2023.05.04

## 2 「夏季せん定」の考え方

せん定は一般に「冬季せん定(休眠期せん定)」を指しており、これに対して「夏季せん定」は、新梢の葉がついている期間に行われるせん定です。

今回の「夏季せん定」となる縮伐は、「新版 せん定を科学する 樹形と枝づくりの原理と実際」(著者:菊地卓郎・塩崎雄之輔、発行:社団法人農山漁村文化協会 2005年)において、「6月、7月のせん定では翌年の新梢は強勢にはならなかったが、8月下旬以降のせん定は休眠期せん定と同様に翌年の新梢を強勢にした」というリンゴの二年生樹の実験結果を参考にしています。

「夏季せん定」によって、強い新梢を発生させること(「強勢」)を少なくして、樹木の負担の軽減化、樹形整形の効率化を図ろうとするものです。

桜の密植栽培地を長年にわたって管理していくため、次のことを目標として作業を行いました。

- ①樹冠内部にまんべんなく光が入り、多数の花を全面的に咲かせること、
- ②桜を鑑賞する来園者が歩きやすく、花を観察しやすい樹形を確保すること
- ③人が脚立で管理しやすい樹高(4m程度)に抑えること

なお、当該地での高所作業車の使用は想定していません。

## 3 2022年7月夏季せん定と2023年2月冬季せん定の評価

上記せん定の対象木は次のとおり。

### ①2022年7月夏季せん定

㊦小松乙女1本、㊧御帝吉野1本、㊨静句1本、㊩ホワイトファスティギアータ1本

### ②2023年2月冬季せん定

㊰子福桜1本、㊱白普賢 1本

2023年2月冬季せん定は、2022年7月夏季せん定との比較のために、松前町商工観光課公園係長松浦慎也氏と当社樹木医木戸口和裕が作業を行いました。

2023年6月17日及び7月6日の縮伐地の調査を行い、サンプル数は少ないですが、その評価は次のとおりです。

- ① 2022年夏季せん定と2023年冬季せん定では、「強勢」は見られず、両者の差は明瞭ではないこと
- ② やや徒長した枝は、ソメイヨシノ系の「小松乙女」、「御帝吉野」では多く、オオシマザクラ系の「白普賢」では少ない傾向で、冬季・夏季の差よりも栽培品種の系統の差が大きいと思われたこと

上記結果から、冬季・夏季の「強勢」の違いが明瞭ではありませんでしたが、当該地全体的に、樹高4メートルを超えるもの、隣の枝と重なりつつあるものが、1年前よりも急に多くなり、幹や枝が細いうちに、早くせん定をした方が良いと考えたため、7月6日から7日にかけて、「平成27年桜集植地」の栽培品種39種個体数48本（枯死した栽培品種5種個体数6本を含まない。2022年7月夏季せん定及び2023年冬季せん定対象木含む。）を対象に実施することにしました。

#### 4 2023年7月6日～7日縮伐等作業

##### (1) 参加者

当日の作業は木戸口のほかに、松前町商工観光課公園係長松浦慎也氏、公園作業員岩間好憲氏、樹木医金田正弘氏（日本樹木医会北海道支部長）及びご子息金田紘幸氏の計5名で行いました。

##### (2) 縮伐（主幹の断幹：側枝切除）の考え方

- ① 主幹の断幹：高さ4m未満にする。（高さ3mの脚立を使って、人がせん定可能な高さとする。）
- ② 側枝切除：隣合わせた樹木が重なり合わず、人の往来が可能な範囲とする。

##### (3) 縮伐及び施肥作業

縮伐作業は、主に脚立での作業で、リンゴのせん定用の手鋸やせん定バサミなどを使用して行いました。「小松乙女」、「アメリカ」といったソメイヨシノ系の栽培品種に「サクラ類てんぐ巢病 (*Taphrina wiesneri* (Rathay) Mix)」の罹患枝が見られ、判別できたものは全て除去しました。



縮伐状況 2023.07.06



縮伐状況 2023.07.07

「アメリカ」では、典型的な「てんぐ巢型」は示しておらず、主幹の上部の枝葉がやや混んでいるように見える、いわば「密生型」もありました。金田樹木医が見つけて、罹患部の除去を行っています。

これまで木戸口は、金田樹木医から、「大山桜」、「釧路八重」の2種で、この「密生型」の病徴を教えていただいて

いたのですが、今回の「アメリカ」では見落としていました、

金田樹木医は、縮伐作業だけでなく、「寒桜」、「アメリカ」などに、施肥として、フルボ酸の植物活性剤の固形化資材「フジミン®Forest」（ペレット状）、樽前産火山灰、高度化成とを混ぜてものを散布しています。



てんぐ巣病「密生型」部分の除去 2023.07.07



「寒桜」の施肥状況 2023.07.07

## 5 2023年11月17日の現地視察及び施肥作業

2023年11月17日に、夏季せん定木の状況視察を行いました。7月のせん定後の新梢は見られず、次の年に向けて、糖分の蓄積をおこなっていると思われました。



縮伐地の状況

2023.11.17



「弥生桜」への施肥状況

2023.11.17



施肥状況

2023.11.17

寒肥えとして、樹勢の衰弱が見られ、冬越しも懸念される「寒桜」、「弥生桜」、「匂桜」、「露小袖」のほか、桜見本園奥にある「更紗星」に、①エアレーション、②砂川産堆肥の散布、③フジミン®Forest（ペレット状）の散布、を行いました。

## 6 おわりに

縮伐の「主幹の断幹」によって、桜の「頂芽優勢」を抑制し、潜伏芽からの萌芽枝の成長を促そうとするものです。樹高を低く抑えて、栽培品種間及び個体間の樹高成長による光争奪戦を制御し、密植栽培地全体になるべく平面的に光が当たるようにして、少しでも「太陽の子」に近い形で育てていこうとする試みです。

縮伐の「側枝切除」は、隣合わせの木の枝の重なりを制御し、人の動線の確保し、桜の花に手が届き、花を鑑賞することができるようにすることが目的です。萌芽枝が出れば、上下の枝に光が当たるよう、枝抜きせん定も必要となります。今回のように、樹勢を見て施肥をするほか、根切りをする、といったことも検討する必要があると考えています。

なお、密植栽培の場合は、縮伐よりも移植を行って植栽間隔を広くした方が、桜の「頂芽優勢」を抑制することなく、本来の生育が期待できますが、移植地の確保や移植に必要な多額な経費がかかるなどの課題があり、ここでは、やむを得ず縮伐を選択しています。

いずれにしても「太陽の子」である桜は、当該地のような4メートル間隔のような密植栽培は避けて、普通の成長を示す桜であれば、8メートルから10メートル間隔で植栽していくことが、桜の植樹の王道で、これによって、多くの労働力が必要となる育樹を避けることにもつながります。